12

山谷は、地図にない街だ。大阪の寄せ場・釜ヶ崎と同じように、一九六六年の町名変更でその二文字は抹消されてしまった。現在、地図で「山谷」という文字を見るのは「山谷堀公園」くらいしかない。山谷堀は、音無川から隅田川に注ぐ水路だった。江戸時代には、猪牙舟（ちょきぶね）という船でこの水路を通って新吉原へ遊びに行くことがぜいたくな遊びとされていた。一九七〇年代半ばから山谷堀は埋め立てられて暗渠となり、細長い公園となった。

ここで、この物語の前後の時代をもうすこし振り返ってみよう。

一九八六年一二月から続いていたバブル景気が一九九一年二月に崩壊。バブル期には山谷の日雇い労働者の賃金は片付けなどの作業でも一万円、トビ職などはその二倍三倍の単価となったが、崩壊後、仕事は激減、それに伴い賃金も急激に減少した。それによって、ドヤに居住できなくなった労働者が次々と路上に放り出された。アブレとアオカン（野宿）を強いられるようになったのである。

日雇い労働者にとって受難の時がついそこまで迫っていることなどつゆ知らず、われらの八つぁん、熊さん、何を思ったのか、いや何も思っていなかったゆえか、起死回生を求めて川崎競馬場に降り立ったのが一九九〇年のまさにバブル崩壊一年前のときだった。なお、当時は現在のようなナイター競馬を行っていない。

ちなみに、川崎競馬場は、川崎駅から徒歩十数分（当時は川崎駅から無料バスも出ていた）というアクセスは便利だが、メジャーの中央競馬と違って、一周一二〇〇メートルという小回りで、馬も一段下とみられている地方競馬場だ。馬券の外れたファンから腹立ちまぎれに「まったく草競馬なんだから！」などと揶揄されてもいた。

この川崎競馬場も、バブル景気に沸いていた頃は札束が舞うような活気を呈していた。しかし、その後徐々に景気が後退、売り上げは伸び悩み、赤字経営に転落、ついに二〇〇四年には累積赤字がピークの三六億円に達した。赤字が解消したのは約十年後の二〇一三年度末まで待たねばならなかった。

「よーし、熊、今日はバッチリとるぞー。軍資金はたっぷりあるからな」

「八つぁん、それがいけないんだよ。無茶な大穴狙いは禁物。せっかく出張で稼いだ金を溶かさないようにしなけりゃ。ご隠居が言ってたよ。賭け事で勝つ秘訣は『勝つと思うな思えば負けよ』だってさ。絶対に勝つってイレ込んじゃ駄目なんだって」

「なんだ、美空ひばりの『柔』かよ」

「そうなんだけど、違うんだ。昔のすごろくの名人がそんなことを言ったらしいよ」

「すごろく？　正月に子どもの頃やったあれかよ。賭け事じゃねえだろ。遊びじゃねえか」

「すごろくは昔は賭け事だったんだって。その名人のありがたーい言葉なんだって」

「いまいつの時代だね。それに、あと十年もすれば時代が変わるんだぞ。熊五郎くん、そういった消極的な生き方ではいつまでたっても俺たちはこの厳しい環境からはい上がれねえんだよ。とりあえず、ほらよ」。八つぁんが買ってきた缶チューハイを渡す。「ふーっ、やっぱりこうして真面目に労働をしたあとに競馬場でチューハイを呑む。たまらんなあ」
「ほんとだね」。熊さんもチューハイの缶を口に持っていきながら、目は競馬新聞を追っている。
「熊だって、目の色が変わってるじゃないか。いいねえ、鉄火場って気がしてきたよ。やっぱり大井競馬より川崎競馬だな」
「なんで川崎まで足を伸ばしたんだい？　来週になれば大井があるじゃないの？」
「俺は東京もんじゃねえし、それに川崎のほうがゲンがいいんだ。昔、川崎でずいぶん仕事をしたからかな。きっと勝負の神様が付いているんだよ」
　場内は人でごった返していた。馬券を買う穴場の前にはびっしり人が並んでいた。でも、他人のことはそっちのけ、ただひたすら考えているのは馬券のことだけで、目は馬と競馬新聞を凝視するばかり。小腹がすくと煮込み、揚げ物、餅などを売っている店に並ぶのだが、ここでも目は食べ物ではなく競馬新聞のほうへ。
　さて、八つぁん、熊さんの戦果はいかに。数時間がたち、ついに最終レースの運びとなった。まわりからは「そのままー」とか「差せ、差せー」の大声、そして「あーあー」というため息も……。
「くそーっ、また一着、三着かよ。今日はツイてねえ、厄日だよ。熊、帰るぞ、ゲン直しで一杯呑まなきゃやってられん」
「複勝とったよ。三着にきてる」
「なにー、熊、複勝なんて馬券を買ったのか？　博打うちの風上にもおけない奴だな」
「この最終レース、難しいって八つぁんも言ってたろ。だから、『勝つと思うな思えば負けよ』で、複勝ね」
「ちぇっ、そんなせこい買い方する奴は、ろくな目にあわんぞ」
「でもねえ、八つぁん、三倍以上つくんだよ」
「それは、よござんしたね」
　競馬場の出口から押し出されるように動いていくたくさんの人。見れば、たいていの者は不機嫌そうに歩いている。八つぁんも同類のふくれっ面である。
「八つぁん、バスに乗らないのかい？」
「負けたときは、黙ってオケラ街道を歩いて帰る。歩きながらその日の反省をする。そうしないと人間、進歩がないからな」。八つぁんは依然、仏頂面だ。すると、熊さんが突然、声を出した。
「あれ、赤い鳥居が見えるよ、八つぁん。こんなところに神社があるんだ」
「だから、どうなんだよ」。熊さんが指さすほうを不機嫌そうに八つぁんが見た。
「八つぁんがいま反省しないと人間進歩がないって言ったじゃないの。だから反省してさ

あ、『次は馬券が当たりますよーに』って拝んだらいいんじゃないかな？」
「ここが博打の神様を祀ってるんなら拝むけどな。意味ねえよ」
「でも八つぁん、ここに『勝』って書いたお札が貼ってあるぜ。こりゃ、まんざら勝負と無関係とはいえないかも」
「ほんとだな。ふーん、『稲毛神社』ねえ。どうせタダなんだから、拝んでおいても損はねえか。熊、お前も手を合わせておけ。熊だって今日は負けたんだろう？」
※「勝」＝試練や困難、病気などに打ち「勝つ」ということで、もちろん八つぁん、熊さんがこだわる勝負事に「勝つ」という意味ではない。
「八つぁん、それが『勝つと思うな……』のおかげかねえ。すこしだけど浮いたよ」
「ふーん、それはご立派なことで。よーし、今日の呑み代は熊のおごりだな」
「いいけど、どうする？　山谷に帰って呑む？」
「いつもの場所っていうのは味気ないなあ。たまの川崎なんだからここで呑もうぜ。どっか、『思えば負けよ』の熊五郎くんの選んだ呑み屋に入りましょ」
「あの、赤ちょうちんはどう？」
「いいんじゃないの。なんか川崎らしい酒場って匂いがするじゃないの」
二人は縄のれんの呑み屋に入って行った。中は競馬場帰りと思われる人でいっぱいだった。
「ここも山谷と同じで、男ばっかりだな。女は博打が嫌いか」
「でも、タカハシ記者は麻雀が趣味だって言ってたよ」
「あの人は、山谷の『大利根』が好きな女だから変わり者よ、例外だな。数えてみろ、ざっと三〇人の客で、女は、えーと四人だな」
「すごいね、八つぁんはさっと見ただけで数えられるんだ。俺なんか指でもってしなければ数えられないよ」
「俺たち日雇いてえのは、ふだんから注意深くしてないとな。ぼーっとしてたら事故のもとだろ。しかし、混んでるな。ここも『世界』や『野田屋』と一緒か。席は空いてるかな」と言いながらも、八つぁんは二人分の席を確保したのだった。「おねえさーん、とりあえず、チューハイ、二つね。一つは負けた腹いせの強いやつ、もう一つはせこい勝ち方の薄いやつね」
頼んだチューハイがなかなか来ないので、すこしイライラしてる八つぁん。「混んでるからかな、チューハイがこないぞ」
「八つぁんが変な頼み方するからだよ。無視されたんじゃないの」
そこに、チューハイがめでたく到着。
「おねえさん、めんどくさいから、もう二つ、チューハイ頼んどくよ。あと焼き鳥とイカ刺し。熊は何にする？　遠慮すんなよ、今日の呑み代はお前なんだからよ」
「俺はおでん」
そうして、二人は運ばれてきたチューハイのジョッキに口をつけた。

「ふーっ、やっと生きた心地になったよ。今日は苦しかった。一着は来るんだけどヒモの相手が来ない。二着が来ても、一着が来ない。つくづく人生ってやつはうまくいかねえもんだと思ったよ」
「さっきまで、ぶすっとしてたのに機嫌が戻ったねえ」
「競馬に負けても、酒がうまいのは不思議だな」
「だって、俺のおごりじゃん」
「ただ酒が呑めるのも、これはひとえにすごろく大明神のおかげか。でも、俺にとっては高いただ酒になったよ」
　ここで熊さんが突然、手で八つぁんを制するしぐさをした。
「八つぁん、あいつ。山谷の……」
「なんだよ」。八つぁんが振り返って、熊さんの見つめているほうへ目をやろうとした。
「山谷で見かけないなと思ったら、こんなところにいたのか」
「なんだ、知り合いか？」
「そんなんじゃねえ。とんでもねえ奴よ。あっ、八つぁん、じろじろ見ないでくれ。あいつはヤクザのうしろでチョロチョロしてて、悪いことをやってたんだよ。現場を押さえてねえけどモガキだってもっぱらの噂だった。で、仲間からそんな目で見られるようになったから山谷にいられなくなったんだ」
「モガキ？　というと無法松の仇かもしれないのか？」
「恰好からすると、無法松をやった奴じゃないようだけど、関係はあるかもしれねえな」
「そんなら、とっつかまえて痛めつけて、白状させてやろうか？」
「八つぁん、いま仲間と三人で呑んでる。こっちは二人だからちょっと不利だな」
「そうかい。ところで、あいつはお前の顔を覚えてるのか？　熊がその席からあいつを見つけたっていうことは、あいつから熊も見えるよな」
「覚えてるかもしれないが、もう忘れてるかもしれないな」
「とりあえず、熊、顔を見られないようにしろ。そうだ、俺と席を替えよう。俺があいつを見張るよ」。そこで、二人はそっと席を交替した。
「真ん中の悪人面してるほうだな。といっても、あとの二人も堅気とは思えないな」。ここで八つぁんがチューハイを一口呑んだ。思わぬ展開で、いつもより呑むピッチが遅い。
「はい、お待ちどう」。大きな声の女店員が、追加のチューハイのジョッキ二つをテーブルにドスンと置いた。
「大きい声だねえ、もうすこし小さいのでも聞こえるよ。あれっ、焼き鳥とイカ刺し、それとおでんは？」
「いま、つくってます。もうすこしお待ちを」と言って戻って行った。
「いまのでかい店員の声で奴がこっちを見たぜ。俺のことを山谷の日雇いって見抜くことはねえよな」
「たぶん大丈夫だ」

「いまひらめいたんだけどな。夕方、俺たちを探すには『世界』や『野田屋』に行けばいいだろ？　だから、あいつらも川崎競馬のときはここで呑むってことじゃねえのかな。ここはそんな感じの店だぜ」
「確かにそうだ」と熊さんが相槌をうった。
「熊、こうしようぜ。あいつらがお開きになってこの店を出て行ったら、俺が一人でそっとあとを付ける。それで、あのモガキ野郎のヤサを見つける。そうなれば、あとで何とでもなるだろう？」
「そうだね。山谷の強そうな奴に応援を頼んでとっつかまえちゃおう。そうだ、ヒガシ探偵にもお願いしよう。格闘技の有段者だから」
「熊、ここはゆっくり呑むぞ。酔っ払っちゃったらへぼ探偵になっちゃうからな」
「八つぁん、あいつみたいな、モガキ稼業をしてた奴が競馬だけをやりに競馬場に来てるとは俺は思えねえな。インチキ競馬予想でもやってたりして」
「ヒガシ探偵が言うには、シャブを売るには人が大勢いるところがいいそうだ。だから、この混雑した競馬場なんかいいんじゃないか。『予想屋の言う通り買っても当たらんよ。これをやれば、頭はすっきり、カンも鋭くなってバッチリ馬券が当たる』とかなんとか言ってな」
　それから二時間後、八つぁんはその男のあとを付けるため店を出て行った。

　ご隠居の家で八つぁん、熊さん、ヒガシ探偵、それにご隠居の四人が額を合わせるようにして話し合っている。いつもなら季節柄、桜の花見の相談でもしてるのだろうと思いきや、そうではないらしい。
「それで、八つぁん、山谷の元モガキというその男の正体はわかったのかい？」とご隠居が言った。
「それがね、結局、尾行を失敗しちゃったんだ。呑み屋であいつらが店を出るのを待ってたときに呑みすぎちゃったんじゃないの？」
「熊、勝手に話をつくるんじゃねえ。違うんだよ。外に出たあと、あの野郎が仲間と別れて一人になったんだ。こっちはしめしめと思って付いて行ったのよ。酔っ払ってるから尾行されてるなんて全然気づいてねえ。それで、川崎駅に着いたのさ。切符売り場に並ぶから、こっちも切符を買うため列に並んだんだ。混んでたんで、見失わないように別の列にな。ここが誤算だったねえ。競馬場の馬券売り場と同じで列はちっとも進まねえ。ところが、むこうの列のほうが進むのが早かったんだな。あいつが切符を買い終わったときには、こっちは前に三人も並んでたんだよ。見れば、改札口から中に入ろうとしてるじゃないの。これはやばい、見失うぞと思って、切符を買うのをやめて追ったのさ」
「切符なしでか？」とご隠居。
「そこなんだなあ。非常手段しかないじゃないの。まあ、すっとね、改札を素通りしてあいつを追ったのさ」
「ふーん、ただ乗りか？　で、どうなった？」とまたご隠居が言う。

「そこに、駅員さんの登場よ。『お客さん、切符は？』なんて言って。すぐにもう一人も飛んできて、そのまま駅員室だな」
「ドジったわけか。昔のホーボーは無賃乗車でアメリカ中を自由に旅してたんだぞ」とご隠居。
「ご隠居の言い方は無賃乗車をけしかけてるみたいですよ。山谷の日雇い労働者なんて犯罪予備軍としかみてない警察の者もいるんですからね。拘留されることだってあるんですよ」。ヒガシ探偵の言いぶりはすこしばかり元の警官に戻ったかのようだった。
「でも、俺だってただでは転びやせんのよ。駅員室に連れていかれるときもあの野郎を見てたんだ。あいつは南武線のホームに降りて行った」
「というと、奴は南武線の沿線に住んでる可能性が高いわけか。たぶん、川崎からそう遠くないところに」。ヒガシの目がキラリと光った。
「ヒガシさん、シャブを取引きする場所の多くは繁華街なんかの人混みだそうだけど」。ここで熊さんが口を出した。
「大きな取引は違うらしいけど」
「というと、競馬場なんかもそれにあてはまるよね」
「そうねえ。あっ、そういえばこんな話を組合のオカさんから聞いたな。四年前かな、映画を撮ってた監督がヤクザに拳銃で殺されたでしょ。その犯人の裁判はとんでもないでたらめだったそうだ。犯人が凶器の拳銃についてこう言うんだ。『松戸の競輪場で初めて知り合った男から四五万円で買った』。こんなムチャクチャな言い分に対して、裁判長は何の異議もなくすんなり認めてしまった。反対に、『そんな馬鹿な話があるか！』って抗議する傍聴していた者をどんどん退廷させていったんだな。おまけに、『日頃からの組の恩義を何とか返したいと思ってたので、義憤に駆られて私がやりました』なんて言い分を喋らせる。なぜか、ヤクザの組織犯罪ではなくて単独犯行としてすまそうとするのが、検察の筋書だったんだな」
「まったく裏でヤクザと警察が取引きでもしてるのかね。山谷の労働者が『警察はヤクザの味方だ』というのも的を射てるってことだな」。今日のご隠居はすこしイライラしているようだ。
「話がそれちゃったが、確かに競馬場でシャブの取引をするってこともなくはないな。その男がヤクザの手下で、山谷でモガキをやってた。シャブとも関係してたかもしれない。でも、モガキがバレちゃったので、やりづらくなって、いまは川崎でシノギをしている。大雑把にそう仮定すると、無法松さんを襲ったモガキとまんざら無関係とはいえないかもしれない。どんな関係かはわからないがね」
「川崎競馬場や、南武線沿いの安アパートをしらみつぶしにして探すか？」。気張った八つぁんの声だった。
「なんか、テレビの刑事みたいだね」と熊さんも嬉々としている。
「刑事じゃなくて、俺らは探偵団だろ」と八つぁん。

「わしは老体だから、そんな直接行動はできんぞ」。仲間外れになりそうなご隠居はちょっぴり憮然としている。
「しらみつぶしじゃなくて、もうちょっと絞った行動にしたいな」と最後にヒガシ探偵が言った。

13

「熊さん、うらやましいねえ。すごい娘さんを連れてるじゃないか。頭の毛が爆発してるよ」とカーリーヘアのサチと熊さんを冷やかす声が向こうのほうから上がった。
熊さんとサチの二人が今日は「大利根」にいた。サチは十六歳になったので二輪の免許を取るため教習所に通っていたが、それに便乗して熊さんも教習所通いを始めた。今日がその初日ということで、山谷見学かたがた、熊さんは日雇い労働者でいっぱいの「大利根」にサチを連れて来たのだ。
「この『大利根』はね、評判の料理なんてないけど、いつも山谷の労働者でいっぱいで、まあ山谷では有名な店なんだよ。えーと、未成年だから、アルコールは駄目っていちおう言っておくよ」
「じゃあ、熊さんは何歳から呑んでたの？」
「大きな声では言えないけど、十六のときは呑んでたなあ。もう働いてたしねえ」。ここで熊さんが白いうわっぱりを着た店員に声をかけた。「おねえさん、チケットのお金、ここに置くよ。瓶ビールと天ぷら、それに若鳥の唐揚げとほっけ。あと、ウーロン茶にする？」
「わたしも、ビール呑んでいい？」
「ちょっとくらいなら、じゃあ、コップは二つね」。熊さんの声がちょっぴりはずんでいた。
「熊さんはずっと日雇いをしてるの？」
「集団就職ってわかる？　中学校を出たばかりの若者が、田舎から都会にたくさん働きに出て行ったんだな。町工場とか、商店とか。でも、大きなところは少なかったな。俺も家が貧乏だったし、勉強も嫌いだったから自然とそうなったよ」。熊さんはビールをコップについでグイッと呑んだ。そして、サチの前にあるもう一つのコップに半分くらい注いだ。
「じゃあ、最初はどんな？」
「俺は手に職をつけたかった。工場なんていやだったし、なんでもよかったけど、すし屋に就職したんだ。でもねえ、一年たっても、二年たっても、雑用ばっかりさ。掃除や洗い物、せいぜい出前くらい。すし職人のイロハも教えてくれない。それに、どこにでもいるねえ、意地の悪い奴。ネチネチした小言、それに手が飛んでくるんだな。修業だと思って我慢してたけど、その先輩がへまをしたんだよ。そしたら、そいつは俺がやったと親方に言いやがった。頭にきたねえ。それで、殴ってそこを飛び出しちゃった」
「熊さん、けっこうやるじゃん」
「いやー、先制攻撃だよ。前もって手荷物をまとめておいて、すぐそこを出る準備をしてた

んだ。で、いきなり殴った。向こうはびっくりさ。ついでに、店の皿やコップをいくつか叩き割って出て行った」
「すごい」
「あとで、やりすぎたかなと思ったけど。でも、割った物は皿とかコップの安い物ばかりだった」
「それって、面白いわ」
「やっぱり、貧乏人の出だからねえ。高い物にはとても手が出せない」
「それで山谷へ？」
「関西にいたから、山谷なんか知らない。スポーツ新聞の求人欄に、仕事を選ばなければいっぱい載ってた。印刷会社や鉄工所、それと飲食店なんかね。そこらをいくつか転々としたんだなあ」
「いまみたいな仕事人の熊さんじゃなかったんだ」
「まあ、若かったから。それで、仕事をやめてもう野宿寸前というときに日払いの仕事があるって聞いて、釜ヶ崎っていうところに行ってみようとしたんだ。でも、場所を聞いても普通の人は知らないし、知ってる人も『えーっ』って言って教えてくれない。何とか行ったんだけどねえ」
「それで？」
「『怖いところだ』って聞いていたんで、びくびくして行った。で、その日はちょっと様子見しただけで帰った。なんていうのかなあ、怖いというより日雇いのおっちゃんたちの迫力に押されちゃったんだな。でも、そんなこと言ってられない。もう金がないので、次の日、朝早くに出かけて、前で手配師がわめいてる車に乗ったんだよ」
「うん、うん」とサチがうなずいて、コップのビールをゴクンと呑んだ。「あれっ、これうまいわ」
「うまいの？　こりゃ、末恐ろしい」と感心しきりの熊さん。
「えへへ」とサチが照れて唐揚げに箸を伸ばした。
「ケタオチどころじゃなかったんだな、その飯場が。ひどいところで、食堂の壁に『無断欠勤三千円の罰金、メシは十分以内に食べろ』なんていろんなことが書いてある紙が貼ってあった。こんなところはまずタコ・半タコ現場で間違いなし。朝はご飯に味噌汁、昼の弁当はメザシ三匹、夜は豆腐一丁。まあ、こんなんだから十分でメシが食えちゃうわけだ。夜十時には棒心といって現場を仕切ってる奴が部屋を見回り、気に食わない者に暴力をふるってた。しかも現場は危険と隣り合わせ、重い物を運ばされる、労災なんてなさそうだし怪我でもしたらアウト。一緒に行った先輩の労働者が言ったんだ。『こりゃ、ひでえタコ飯場だ、トンコしたほうがいいぞ』って。それで、次の日の朝早くに二人で逃げ出したんだ。あとになってわかるんだけど、日雇い労働者にとって『危険、キツイ、安い』をかぎ分ける嗅覚が本当に大切なんだよ」。熊さんはそこで一息入れて、焼いたほっけをつまみ、そのあと立て続けにビールをコップ二杯呑み干した。「おねえさーん、チューハイ一つね。やっぱりチュ

ーハイだな」
　サチは熊さんの箸があまり進まないので、並べてある天ぷらと唐揚げを一生懸命になって食べている。口をモゴモゴ動かしているサチ。熊さんがまた話し始めた。
「それから、その先輩と一緒に仕事に行くようになったんだ。仕事も教えてもらってずいぶんと助かったよ。それが、一年と半分くらいたったときかな。先輩が現場で大怪我をしちゃったんだ。命は助かったけど、日雇いはもう無理さ。『田舎に帰った』とか『生活保護をもらって近くで生きてる』って噂を耳にしたけれど、釜ヶ崎ではとんと姿を見かけなくなった。俺はそれから一年くらい釜ヶ崎にいたかな。日雇い労働者ってあっちへ行ったり、こっちへ来たりとけっこう移動してるんだよ。いい仕事はないかなんてね。それで俺も東京の山谷って聞いていたのでちょっと行ってみようかなって」
「それから山谷？」
「そう。最初は働いた金はみんな呑んじゃった。金がなくなると、野宿してたな。体にいいわけないけど若かったから」
「無茶してたんだ。わたしたちの仲間も馬鹿やってる奴いるよ」
「そうしたら、日雇いの一人に声かけられた。『あんた、いつもここにいるねえ』って。それが八つぁんさ。で、『いくら若いったって、呑んでアオカンして、また呑んだら体がぶっ壊れるぞ』って」
「へえー、八つぁんって意外にまともじゃん」
「そんなんじゃないんだ。ずっとあとでご隠居に聞いたんだけど、その前の日に呑みすぎでへろへろになった八つぁんをご隠居がかなり説教したらしいんだ。それで、次の日に俺を見たんで、自分が言われたことをそのまま俺にぶつけたんだな。まあ、されてるばっかりだったんで説教ってもんをしてみたかったわけさ」
「なーんだ」
「ただ、八つぁんは俺なんかより学があるんだ。高校を出てるの。それで、ご隠居はインテリだけど大学を中退してるから、八つぁんは『俺は卒業してるぞ』っていばってるんだよ」
「じゃあ、ご隠居はあたしと同じ仲間ね」
「サッちゃんはやっぱり学校をやめるんだ？」
「決めたんだ」
「そうかい。まあ学校なんてろくなところじゃないと思うけど、じっくり考えたほうがいいよ」
「熊さんって意外と常識人ね」とサチは熊さんのほうを見た。サチが言った何気ない「常識人」という言葉とその視線を受けて、熊さんはなぜかどぎまぎしたのだった。「それからどうしたの？」とサチが訊いた。
「八つぁんと仕事も一緒に行くようになったんだ。それから、ご隠居を紹介されてアパート住まいを始めたんだよ。八つぁんもそこに住んでるっていうんで。日雇いっていえばドヤじゃないの、アパートなんて考えてもいなかったけどね」

「ちょっと、八つぁん。そんなにむきになって競馬新聞を読んでもしょうがないんじゃないの。競馬が目的じゃないんだから」と熊さん。
「メインレースはこの三頭で決まりと。問題は最終レースだよな。終わりよければすべてよしって言うからな。そうなんだよ、最終で一発逆転ってことがあるからな」。八つぁんは熊さんの言葉が耳に入っていない。
「八つぁん、今日はあいつを尾行して居所を突き止めるんだよ」
「うるさいなあ。そんなことは承知の助よ。でもなあ、探偵が尾行してますよってクソ真面目な動きじゃあ、あいつに感づかれちゃうだろ。ここが肝心よ。こっちが競馬オヤジならバレっこねえじゃんか。これも優れた探偵さんのカモフラージュよ。熊、カモフラージュってわかる？　賭け事のカモじゃないよ。それに、せっかくの一獲千金のチャンスかもしれねえのにそれをみすみす逃がすってえのはねえだろ？」
　今日は川崎競馬の真ん中の開催日で賞金の高い重賞レースがメインに組まれていた。熊さんと八つぁんは、元モガキが例の縄のれんに現れるとしたらいつだろうかと考えた。
「川崎競馬の最終日には、たぶんあの酒場で呑んでるだろうな。それと重賞レースの日とか」。八つぁんが自信がありそうに言った。二人は最終日と重賞レースのある日の二日間を元モガキ尾行の日と決定した。
「この間の失敗があるから、前もって駅で切符を買っておいたほうがいいよ。八つぁん」
「同じヘマはしねえよ。しかし近くまでの切符じゃまずいな。立川ならまず大丈夫だけど、そんな遠くじゃなさそうだから登戸くらいにしとくか。いや待てよ、変なことでケチって大失敗したことがあったな。もう一点買っとけば万馬券が取れたってことがよ。やっぱり立川駅まで買っとこう」
　重賞レースの当日、馬が走っているのに馬券を買わないはずがない二人。外れ、外れとき て、たまに当たるが配当は安い。最終レースも一発逆転とならず、この前のときは収支がプラスだった熊さんも負けとなって、二人はオケラ街道をとぼとぼと歩く羽目になった。
「ゆっくり行こうぜ。あいつもまだ呑み屋にいないだろうし、どうせ二時間や三時間は粘るんだろう」。周りをさっきまで目の色を変えていた者たちがぞろぞろと歩いている。八つぁんは、黙して語らずの者、あるいは言い訳なのか講釈なのか、連れに大きな声でしゃべりまくっている男を見ながら言った。「こう歩いてると思い出すなあ。以前は、競馬場ではもっと目をギラギラさせてた。金が何倍、何十倍にも化けるかもしれないと思うと、馬券代の他はすべてケチって、腹が減っても喉が渇いても、呑み食いなしでひたすら馬券につぎ込んでた。それで結局、帰りには電車賃と、これだけは死守した缶チューハイ代しか残っていなかったよ」。八つぁんは馬券で負けた割にはなぜか上機嫌だった。
　八つぁんが一人でその縄のれんに入って確かめてみると、元モガキはもう来ていた。「やっぱりあいつも山谷にいた奴だな。早くから呑みてえタチだよ。呑み仲間は一人のようだ」。八つぁんが外で待機していた熊さんに言った。それから、八つぁんは駅に向かい切符を買っ

て戻って来た。「どうだ、熊、今日はしゃれてカフェーでコーヒーでも飲もうじゃねえか」
「えっ？」
「あいつを見張りながら呑んでも酒はうまかねえや。あそこの窓際なら探偵するにはばっちりだぜ」
　こうして、二人は喫茶店に入り、運よく窓際席を確保したのだった。しかし、喫茶店で二時間以上も二人が時間をつぶすのは容易ではない。
「しかし、メインレースはまいったな。ゲートで暴れてたと思ったら出遅れだもんな。もうそこでアウト。人だって馬だってスタートが肝心なのによお」
「八つぁんはスタートはよかったのかい？」
「えっ？　俺のことじゃねえよ。あの馬だよ」
「だって、『人だって馬だってスタートが』って言ったじゃないの」
「熊、お前けっこういやなこと聞くねえ。うーん、思えば俺も前途多難な船出だったなあ。でも、いまはこうやってカフェーでコーヒーを飲みながら探偵をしてるんだから、スタートはともかく、まあまあがんばってるんじゃねえの。そうよなあ、下層の中くらいから出発していまは中流の下くらいにはなってるだろう」
「ええーっ、八つぁんが中流？」と熊さんが大げさな声を出した。
「熊五郎くん、お客さんが迷惑するからそんな大きな声は出さないの。じゃあ、おおまけにまけて下層の上の上、そうよ、下層の特上かな」
「八つぁん、あのさあ、下層とか中流とかって区別するのよくないってさ」
「熊、言うじゃないか。俺は区別とか差別なんかの気持ちはねえよ。だいだい、お前が変なことを言いだすからこうなったんじゃねえか」。八つぁんはすこし不機嫌になった。
「八つぁん」
「なんだよ」
「俺たち、さっきから探偵してないよ。もう一時間以上たってるから、そろそろ見張らなくちゃ」
「なーに、あの呑んべえたちが一時間やそこらで出てくるわけねえさ」
　こうして二時間半がたった頃、元モガキと仲間の一人が店から出てきた。
「やっとお出ましになったか」。二人はすばやく支払いを済ませ、その喫茶店を出た。面が割れているかもしれない熊さんは、八つぁんのうしろのほうから付いて行く。
「あれ、あいつ駅に行かないぞ。どっかに寄るのかな？　ええーっ、あいつ今日はチャリだぞ」と八つぁん。
　元モガキは二人に見張られてるとはつゆ知らずに、しかしひょいと自転車に乗って去って行った。それを、ぼうぜんと見送る二人。
「くそーっ、あいつ、酔っ払い運転じゃねえか」と悔しそうな八つぁん。
「まいったね。でも、やっぱり、あいつは川崎の近くに住んでたんだ」
「最終日は、電車とチャリの二本立てにしなけりゃいけないな」

「じゃあ、八つぁんは電車で尾行の係ね。今日みたいにチャリだったらサッちゃんに頼んでオートバイで尾行しよう」
「あの子、オートバイの免許を持ってんのか」
「十六になったからつい先日取ったんだよ」
「熊、お前も二輪の免許取るって言ってたなあ」
「俺はまだだよ。いろいろ忙しかったから」
「嘘つけ、中年オヤジで運動神経が鈍くなったんだよ。でもよう、十六の女の子一人に、ヤクザかもしれない元モガキを尾行させるのは問題だぜ。ヒガシさんがうんと言うわけねえよ」
「大丈夫。俺がうしろに乗って行くから。ヘルメットであいつに顔も見られないし」
「ええーっ、十六歳の女の子が運転するオートバイのうしろに日雇いの中年男が乗るのかあ？」
「駄目かなあ？」
「免許だって取り立てのホヤホヤだろう、あぶねえよ」

熊さんのこの計画にサチは乗り気だったが、ヒガシ探偵とご隠居の拒否権行使でボツになった。そのかわり、サチとヒガシ探偵の口利きで、サチの暴走族の友だちがライダーとなって尾行することになった。その二五〇ccのオートバイのうしろにヘルメットをかぶり革ジャン姿の熊さんが乗ることになった。ただ、サチはそのうしろから一二五ccのオートバイで付いて行くことを頑強に主張した。結局、運転には十分に気をつけるということで認められたのだった。そしてもう一人、タカハシユウコ記者が割り込んできた。
「わたし、川崎ならチャリンコで一時間もかからないわ。わたしもチャリンコで追跡していい？」
川崎競馬の最終日、例の元モガキの乗り物は果たしてチャリだった。こうして、八つぁんの電車尾行はなくなって、オートバイでの尾行となった。暴走族のライダー、熊さん、サチ、そしてチャリンコのタカハシによる元モガキ追跡大作戦が決行された。

14

オートバイ・チャリンコ追跡大作戦で、ついに元モガキ男のヤサを見つけた。さてどうする？
ここは、毎度のご隠居の家。外は、雨まじりの強い風が吹いている。桜の花はすでに散っていて、かわりにつけた緑の葉が大きく揺れていた。
「まいったねえ、傘がまるで役に立たねえよ。衣装が台無しだ」といって、八つぁん、それに続いて熊さんが入って来た。
「天気も風雲急を告げているんじゃのう。けっこう、けっこう」とご隠居が機嫌よく二人を

出迎えた。
　ヒガシ探偵をまじえた四人が集まって、これからなにやらの談合があるらしい。今日のヒガシ探偵はふだんのラフな格好ではなかった。グレーの背広、ワイシャツそれに縞模様のネクタイをしている。
「さすがに、元は巡査部長さんだ、さまになってるよ」とご隠居。
「えーと、私は今回は一ランクえらくなってニシ警部補です。ご隠居はもう一ランク上の警部です。声をかけるときは名前なしの『警部』だけでいいでしょう。八つぁんは八木刑事、熊さんは熊沢刑事です。くれぐれも名前を間違えないでくださいね」。ヒガシがさらに続けた。「服装だけど、熊沢刑事はいまのジャンパーにシャツ、ノーネクタイ、野球帽でいいんじゃないの。髪の毛はすこし櫛をいれてね」
「こんな着古したジャンパーでいいの？　阪神タイガースの野球帽は無法松の遺品なんだ」
「無法松さんは、阪神ファンだったのか。まあ、それはともかく、熊さん、いや熊沢刑事は奴に面が割れてるかもしれないので、マスクをしてほしいな。行動は夜だし、尋問する場所も薄暗くするから大丈夫だと思うけれど。熊沢刑事は無言で圧力をかけてください。八木刑事はイメージとしてはマル暴デカ、暴力団担当の刑事ね。ご隠居のお古だそうですが、その背広とワイシャツ、ちょっと派手な濃紺と赤のストライプのネクタイがぴったりですよ。尋問は、だいたい私、ニシ警部補がやりますが、なにセマル暴デカですから、奴がぐずぐず言って要領を得ないときには、机を叩いたり椅子を蹴とばしたりして、『なんだ、この野郎！つまんねえ能書きたれてると、しまいにゃぶっ飛ばすぞ！』なんていう恫喝もありですよ」
「この前は、俺の出番はなしだったんで、今度はビシビシ行くぞ」とことさら張り切ったそぶりの八つぁん。
「ニシ警部補、暴力は禁物ということで。八つぁんと熊さんは、興奮したら手が出ちゃう恐れもあるからな。ふふふ」。ただ言葉とは裏腹に、ご隠居の口調は実力行使もＯＫというように聞こえてしまう。
「なんか、ご隠居はいきいきとしてるみたいですね。まあ、今回は表ではなくて裏の探偵行動だから、少々の恫喝もよしとしますが、物理的な暴力はなしですね」
「『必殺仕掛人』の中村主水みたいにやっつけたい気もあるけどな」と熊さんがぼそっと言った。
「ご隠居はバリッとしたスーツをお持ちだそうで……」
「あとハンチングとサングラスで決めようと思う」
「ああ、そうですか……まあそれでけっこうです」
「ご隠居、その恰好は安物のテレビ番組じゃないですか」と八つぁん。
「相手は元モガキのチンピラみたいだから、ちょっとやりすぎって恰好のほうがいいかもしれないよ」とヒガシ探偵。「これから本筋の実際行動について話しますが……」
　車は川崎駅から南武線沿線を二十分ほど行ったあたりの、とある木造二階建てアパート

の前で停まった。夜の十一時をまわった頃だった。目ざす二階の部屋には、電気が点いている。川崎競馬の開催時には、インチキ予想屋の下準備もあるのか、彼は一杯呑んだあと意外と早く部屋に戻っていた。それは、追跡大作戦のときなどの彼の行動でわかっていた。

車は組合のオカさんから借りたものだった。運転は熊さん、いや熊沢刑事、うしろの席にマル暴の八木刑事、そしてそれを率いるニシ警部補が乗った。ご隠居が扮する上司の「警部」はまだ自宅で待機している。

「さあ八木刑事、熊沢刑事、気合を入れて。よし行くぞ」とニシ警部補がニヤッと笑って先頭に立つ。次いで八木刑事、そして熊沢刑事が続く。二階までの階段を昇り、目ざす部屋の前に来た。八つぁん、熊さん扮する八木刑事、熊沢刑事は、全面的にニシ警部補に任せているのか、それとも、あとは野となれ山となれの日雇いのくそ度胸なのか、意外と落ち着いている。

「署の者だ、ドアを開けろ」。ニシ警部補がドアをいきなりドンドン叩いて怒鳴った。

しばらくして、元モガキがそっとドアを開けた。紺色のシャツにグレーのズボン姿だった。警部補は調査手帳（これは警察手帳とそっくりの代物だ）をさっと見せると、「訊きたいことがある。任意同行だが、ちょっと来てくれないか？　上着をとってこい」。威圧的な態度の警部補が部屋の中を指さした。元モガキはおどおどして、言われるままに薄茶色のジャンパーをとって来た。八木刑事と熊沢刑事がすばやく両サイドから腕をつかみ、外に引っ張り出す。任意どころかほとんど強制だ。階段では両刑事が前後から挟むようにして、車が停めてあるところに連れて行く。男は車がパトカーじゃないので怪訝そうな顔をしたが、うしろから八木刑事が車内にぐいと押し込んだので、仕方なくそれに従った。ニシ警部補がそのあとから続き、八木刑事は反対側のドアから乗り込み、男をサンドイッチ状態にして出発した。その間、あっという間だった。警部補が「けっこう、けっこう。じゃあ、車を出して」と運転席の熊沢刑事に告げた。

「これから行くところは特別捜査班の事務所だ。秘密の場所なので、ちょっと我慢してもらう」とニシ警部補が言うと、八木刑事が黒い目だし帽を逆にかぶせた。

目ざすはヒガシ探偵事務所だ。同じ二階の向かいにはオカさんたちの組合事務所がある。車は山谷に直行せず、わざと迂回して二時間ほどかけて事務所の下に停車した。

日雇い労働者の街・山谷は朝が早い。それもあって、夜も更けると人通りが少ない。組合事務所の電気はまだ点いているが、まわりは静かだ。三人の偽警官は、元モガキを車から降ろした。そして、目隠しをしたまま階段を昇らせて、事務所の中に連れ込んだ。中は薄暗く、机が一つとパイプ椅子が四つあるだけで、がらーんとしている。片付けられたのか、いつもはあるはずの冷蔵庫やテーブル、ヒガシ探偵用の傾いた籐椅子、さらに電話も見当たらない。

「帽子をとって椅子に座れ」とニシ警部補が言った。

男が目隠し用の帽子をとると、ニシ警部補と八木刑事、それにハンチング帽にサングラスをしたスーツ姿の男がパイプ椅子に座っていた。もう一人の刑事の姿は見えなかった。

「警部、熊沢刑事には連絡のため署に帰ってもらいました」というニシ警部補の言葉に、そ

の警部が「ニシ警部補、ご苦労」と返した。
「さっそくだが、いくつか質問に答えてもらう。お前が知っていることをすんなり話してもらえれば、すぐにここから解放する。われわれは情報がほしいだけだ。もちろん、黙秘権はある。だが、われわれ特別捜査班というのは重罪の中でも特に悪質な事件を扱う班だ。その質問に答えなければお前の立場は非常に悪くなる。以上のことを考えたうえで返答してもらおう」
　八木刑事には、このニシ警部補の言いようがわざとらしく聞こえたが、元モガキには効果てきめんなのか、体を縮こめていちいちうなづいている。
「さて、始めるぞ。これは調べがついているのだが、いちおう聞いておく。お前は山谷でモガキをしてたな」
「ずいぶん昔のことで、いまはやってません。だいいち山谷には行ってないし」
「ふーん、そうか。ではいまはなんで食ってるんだ？」
「そのー、川崎あたりで働いてます」
「だから、何してるか聞いてんだよ」
「えーと、日雇いとか……」
「毎日毎日、川崎の呑み屋に通っているそうだが、日雇いでそんなことができるのかね？」。八木刑事がそこでこらえきれずに吹き出してしまった。
「八木刑事、なんかおかしいことでもあるのか？」
「いやー、日雇い労働者はみんなのん兵衛ですからねえ」と八木刑事が余計ことを言った。
「へえ、そうなんで」と元モガキがその言葉に乗っかった。
「冗談はそこまでとして、お前が関係してる組は博徒系だったな」
「えっ？　俺は組員じゃねえですよ」
「構成員じゃなくても、関係があるだろ。お前もバクチで食ってんだろう？　競輪競馬のノミ屋とか？」
「……」
「黙ってたって始まんないんだよ。川崎競馬で詐欺まがいの予想屋をやってんだろ。答えないんだったら詐欺罪であげるぞ。調べはついているんだから」
「あのー」
「あのー、じゃねえ。もう一回言うぞ。この特別捜査班は重罪を扱う特別な班なんだよ。ケチな偽予想屋をパクる仕事なんかしてないんだ。だから、お前の稼業がどうのこうのって逮捕してる暇なんかない。それよりも、これから尋ねることにさっさと答えろ。いいな」
「へえ」
「よし、いまはモガキをやってないと言ったが、これは信用しよう。だが、モガキの悪さについては耳に入ってきているだろう。去年、山谷で無法松という日雇い労働者がタチの悪いモガキ二人組に襲われて大けがをした。しかも不思議なことに、金も取らずに半殺しにするほどの暴行を加えただけだった。キョトンとした顔をしてるが、同じ穴のムジナだったお前

が知らないはずがない。この二人組のやり口は山谷の日雇いにあっという間に知れわたってしまったので、二人組はシノギができなくなったのでトンコした。お前、どこに逃げたか知ってんだろう」
「ちょっと、そこんとこは……」
「とぼけ続けてたらどうなるかな。警部、ここは私に任せてもらえますよね」
「うーん、わしはここにはいなかったことにしよう」
「ズバリ言うぞ。お前はそいつらを知っている。それは顔に書いてある」
「……」
「この件には、白い粉が絡んでいる。われわれはそうにらんでる。お前が関係する組も覚醒剤を売ってるな。お前もそれに絡んでるとすると、ただではすまんぞ。さっきはすぐに解放すると言ったが、そういうわけにはいかないかもしれない」
「俺は関係ないですから。シャブなんか売ったことはないです」
「ほんとうか？　モガキなんてやってた奴の言葉は信用できないな。だいたいモガキとかシャブとか任侠の道をはずれてるだろ」
「そ、それでモガキはやめました……シャブなんかやってませんよ。俺の兄貴分が『シャブは売るもんで自分でやるもんじゃない』って言ってたんです。でも実はやってて。それがどんどんひどくなって、幻覚を見るようになって病院送りですよ。それで、結局、死んじゃった。生きてたら組をしょってたってたんじゃないかな」。元モガキは急に饒舌になった。
「わかった。お前がシャブとは関係がないっていうことは、とりあえず聞いておこう。ここでもう一度聞く。さっきの話のモガキ二人組のことだ。昔のこととはいえ、お前も山谷でモガキをやってたじゃないか。同業者だったんだから、そいつらのことを知らないはずがない。知ってることを話してくれるな」
「俺と奴らとは関係する組が違うから……」
「ほら見ろ、組が違うって言うんだから知ってるじゃないか。もう隠すことはできんぞ」
「俺が話したことがばれたら、U組の奴らに消されちゃいますよ」。元モガキの目の先があちこちに移り、明らかに困惑しているのがわかる。
「ほーっ、モガキ二人組はU組か？」
「……」。元モガキはますます動揺している。
「話してもらわなくちゃ困るんだよ」
「でないと、非常手段をとるぞ」。ガタンとパイプ椅子から立った八木刑事が大きな声を出した。ビクッとした顔の元モガキ。
「われわれは民主的な警官だから、暴力は振るわんがね。だがなあ、知ってるか？　モガキが山谷でどんなに嫌われてるか。前に日雇い連中にモガキが捕まったことがあった。労働者たちの前に引っ張り出されたモガキはどうなったと思う？　糾弾されたあげく、ボコボコの半殺し状態にされてしまって、結局、病院送りだったそうだ。集団が興奮すると怖いぞ」
「まあ、非常手段というのはそういうことだ」と八木刑事。

「警部、彼を縛って『こいつはモガキだ、仲間を殴って金を盗んでいた』と書いた厚紙を体に巻き付けて、玉姫公園にでもほうっておきましょうか。それとも例の過激な組合事務所の前のほうがいいかな」
「そ、それは……知ってることは話しますよ。でも、それが本当かどうか責任もてませんよ。ガセかもしれませんから」
「ガセかどうかはこっちが調べて判断するから、何でもいいから話すんだよ」

元モガキがつっかえながら語ったことは次のようなことだった。
――モガキ二人組は、ヤクザ組織のU組と関係がありました。無法松といいましたっけ、彼に裏の取引現場を目撃されたらしいんですね。ええ、U組はシャブをシノギにしてましたから、たぶんシャブの取引だったんじゃないですか。そのあと、詳しいことは自分にはわからないんだけど、無法松が山谷の組合のメンバーということがわかって。えっ、違うの？　とにかく、もし組合と一緒になって追及でもし始めたら大変なことになると。そこで、U組の指図でモガキ二人組が彼を襲ったようですよ。都合のいいことに、あそこの警察は被害者が日雇いの事件なんて捜査はいい加減ですからねえ。あっ、みなさん方はそんなこと、もちろんないでしょうけど。二人はいまはU組の構成員になったのかな。それでこの襲撃で山谷にいられなくなったこともあって、U組の縄張りの池袋だったかな、それとも新宿かもしれないですが、そこらあたりで動いているみたいです。たぶん、みかじめ料やノミ屋の売上の取り立て、もしかしたらシャブを売ったりしてるんじゃないですか。自分はU組とは無関係で川崎競馬場で予想屋をしてますが、月一回数日の川崎競馬開催では食っていけないので、ときどき日雇いをしてます。
これらの情報は、つじつまが合っているようだった。
「警部、どうですか、こんなことで？」
「おおむね筋が通っているようだな」と警部が鷹揚に言った。
「では、協力してくれたので、これで解放する。ただ、これで終わりじゃないぞ。三日後に連絡をするからな。その間に、思い出したこと、勘違いしたことなどをしっかり整理しておくように。こちらも、お前の言ったことの裏をとっておく。もう真夜中なので、熊沢刑事と八木刑事は車で送ってやってくれ」と戻って来た熊沢刑事にニシ警部補が言った。元モガキは再び目だし帽の目隠しをされて、二人に引っ張られるようにして部屋を出て行った。

その三日後、ヒガシが元モガキに電話を入れた。「俺だ、ニシ警部補だ。どうだ、なんか思い出したか？」
「警部補さんですか。この間、話した通りなんですが、あと、二人組がシノギをしてるのはやっぱり池袋みたいです。そこはU組が別の組から縄張りを借りてるところですから」
「そうか、たぶんそうだと思った。もっと思い出してもらうために、いまここに八木刑事と熊沢刑事がいるので、これから二人を事情聴取のため、そっちに行かそうと思うが都合はど

うだ？」
「勘弁してくださいよ。もう話すことなんかぜんぜんないですよ」
「隠してることはないんだな」
「ええ、本当ですよ……」。元モガキの言葉がすこし小さくなった。
「言葉がはっきりしないぞ」
「いや、二人組の事件と関係がないんですが、ちょっとあって。たいしたことないんですよ」
「たいしたことでなくてもいいから言えよ」
「実は、シャブの売人をやってた奴から聞いたことなんですが……」
元モガキが話したのは、組織のシャブ販売の方法だった。
――いろいろと工夫してるというんです。注文では転送電話を使ったり、宅配便を用いたりして、密売の拠点や売人の顔を知られないようにするんだそうです。例えば、いくつか転送させた電話で客から注文を受けると、まず客に金を置く場所を指定する。金を確保したあと、客が再び電話をかけてきたら、そこで覚醒剤の置かれた場所を教えるというんですね。そいつは自動販売機の裏側なんかにシャブを隠しておいたらしいです。
「ふーん、シャブを売るにもそんなことをねえ。それに、ヤクザは縄張りの貸し借りなんていうのをやってんのか。楽な商売をしてるかと思ったけど、そうでもないか」と八つぁんが妙に感心していた。

15

相も変わらずの立ち呑み屋「世界」。まだ午後の三時をまわったばかりというのに、八つぁんと熊さんはもうとっくにほろ酔いを通り越していた。日頃からご隠居に「陽の高いうちから呑むな、酒は夕方からだぞ」なんて言われているにもかかわらず、そんな忠告なぞどこ吹く風、二人は実にいい気分だった。それは、例の「ニセ警官」「ニセ特別捜査班」の大捕り物が、思った以上に首尾よくいったことにあった。
「あいつ、けっこういい奴だったじゃねえか」。酔いのせいか、八つぁんの声は周りが騒がしい中でもいちだんと大きかった。
「でもさあ、あいつはモガキだったんだぜ。情けなんかいらないよ。酔ってる奴を殴って金をふんだくってたタチの悪い強盗だよ」と熊さんが言い返した。
「悪いに決まってるけどさあ。人の道から外れてるって気づいたからやめたんだろう」
「だけど、競馬のインチキ予想で人から金を取ってんだよ。全然、改心してねえよ」
「シャブは売らない、モガキもやめた。でも、いまは人をだまからかす競馬の予想屋かあ。どの道、ロクな商売じゃあねえけど、すこしはマシになってるんじゃねえの。違うか？」
「俺はそうは思えねえな」と熊さんがすこしムキになって言った。
「おっ、熊はなかなか厳しいな。そういえば、競馬場の帰りに道端でインチキ出目表を売ってた奴がいたなあ。サクラが一人見物人の中にまぎれ込んでいてさ」。すると、八つぁんは

その男の口上を突然真似し始めた。

――ここにいる人はだいたい競馬に負けた人だねえ。いいかい、競馬ってのは一筋縄じゃいかないの。だって、相手は馬だよ。いくらタイムがああだ、騎手がこうだ、調教がどうだって言ったってねえ。それで的中したら苦労はいらない。そうは問屋がおろさないねえ。そう簡単には当たるはずがない。それはみなさんもご存知のこと。では、なぜ当たらないのか。勝ち負けっていうのは法則があるんだなあ。それをつかまえれば、実は簡単。つまり数の法則ね。ギャンブルは数なんだよ。賽の目は一から六で、丁か半かって賭けるけど、競馬はもっと数が多い。出る目を読むのが難しいのは当たり前だ。神様にでもその数を聞きたいもんだが、そうはいかないイカのキンタ……おっとっと、ここにはご婦人もおられるでしょうから、それ以上は言えません。俺もずいぶんと授業料を払ってきたよ。それはみなさんとまったく同じ。でも、もうこのままいったら家族全員、路頭に迷うしかないってとこまできたんだなあ。こう見えても、家には、といっても借家だけど、八歳をカシラに三人ガキがいる。それから俺じゃあガキを産めないから、共同生産者の嫁さんが一人いるんだよ。俺も考えたよ。それで一念発起してここ十年の競馬の成績を必死に調べたんだ。毎夜、かなたの星にすむギャンブルの神様にお祈りしてな。こら、笑うんじゃない。まあ、いまのは冗談だけど。で、出来上がったのがここにある、『競馬必勝のための出目表』だ。百パーセント的中するなんて大ボラは吹かないが、まあ半分は当たるっていう自信はある。いいかい、試してみよう。そこの人、ほら。ここでサクラの登場ね（と言って八つぁんはサクラがその出目表の冊子を手に取るしぐさをする）。今日のメインレースは何が来た？　その声に乗せられた誰かが『5―8』と言う。どうかね、見方わかるかな。今年はイノシシ年だな、その四月十日の十一レースだよ。そこでサクラがつっかえながら言うんだな。「えーと、『3―8』だ」。ちょっと惜しいか。すかさずサクラが続ける。「あと、『1―8』と『5―8』も書いてあるよ」。ほーら見ろ、当たりじゃないか。で、配当はいくらついた？　別の男の『三二五〇円！』という声。三点で三二五〇円かあ。いい配当じゃないか。ごらんの通りだ。さっきも言ったが、パーフェクト的中なんて無理だが、半分は当てるのがこの出目表だ。みなさんにお分けしたいのはやまやまだが……。「けちけちすんな、俺に一冊譲ってくれよ」。ここでサクラの太い声。そうは言われても困るんだなあ。だって、この出目表をすべての人が持ったら的中する者が続出して配当がメチャクチャ低くなっちゃうからな。よーし、ここにいま五冊ある。その限定五部をみなさんにお分けしましょう。でもねえ、こちとらも生活があるから、さっきも言ったように一家五人が何とか食っていくために助けると思って、みなさん、買ってちょうだい。そうよねえ、一冊五万円といいたいが、みなさん、やられちゃって懐がさみしい。清水の舞台から飛び降りる気持ちで、どうだ！　三万円！　えっ、誰もいない？　みんな懐がさみしいんだなあ、値下げするのを待ってんの？　ちきしょう、えーい、持ってけ、泥棒、二万円でどうだ！

「よく、八つぁんはそんなことを覚えてるねえ。もしかして、そのインチキ出目表を買ったんじゃないの？」と熊さんが八つぁんのほうをじろりと見た。

「ご隠居、いますか？」。熊さんが例のごとく玄関の引き戸をガラガラと引いて家の中に入って行った。ところが、いつもは障子の横から顔を出すのだが、ご隠居の姿が見えない。不在？　それとも……「あれー、ご隠居、どっかに隠れてるんですか？　それとも、あのー、死ぬのはなしですよー。せっかく家賃を持ってきたのに」

「よー、熊さんかい」。そこで、奥のほうからご隠居の声。熊さんがそっちに目をやると、ご隠居が何やら窓の外を見ている。

「何を見てるんですか？」

「いや、鳥の鳴き声が聴こえたのでね。最近、無法松さんの影響か、鳥が飛んでるとつい目が行っちゃうんだ。それから鳴き声がすると何という鳥かなって思っちゃう。ほら隣の家の庭にはけっこうな樹が何本もあるだろう。うちとは違って邸宅だから鳥がよく来るんだよ」

「ふーん、無法松の野鳥の会ですか？　あれっ、ご隠居はこの間は、もう老眼で小さな字がかすむとか何とか言ってませんでしたか。無法松は双眼鏡で覗いてたそうだけど、自前の目で見られるんですか？」

「まあな。遠くを飛んでるのを見たり、潜んでる鳥を見つけるわけじゃないからな」

「俺なんか、カラスと雀、それに鳩くらいしかわかんないな」

「わしだってそんなもんだったよ。昔、日本各地を放浪したときだって、鳥なんて興味なかったさ。たまにホーホケキョなんて鳴き声が聴こえたときに『あれ、ウグイスだ』なんて感じるくらいで。いま思えば、花だってそうだったな。いろんな色と匂いの花を見ていたはずなのにさっぱり思い出せない。ずいぶん無粋な旅をしてたもんだ」

「ところで、ここにはどんな野鳥が来るんですかい」

「当然、雀は多いいな。あと木の上や電線にはカラスがカーカーじゃ。鳩はここじゃなくて公園にいっぱいいる」

「えっ、それだけ？」

「カラスに雀、鳩、これだって立派な野鳥だがね。気をつけて見ていると、身近なところにもけっこういるんじゃよ、他に野鳥が。うちの庭にもときどきエサを求めて小鳥が数羽集まって来る。雀がチョコチョコ歩き回っていると思ってたんじゃよ。ところが、雀だけじゃないんだな。ちょうど同じような大きさの鳥が来るんだ。でもどこか違う。よく見ると、くちばしが橙色だ。ということで、本屋で買ってきた『鳥類図鑑』で見てみると……」

「さすが、太っ腹の大家さん、本を買ってきた？」と熊さんがちゃかす。

「ふふふふ。わしは八つぁん、熊さんたちのような労働者階級ではないからな」。ご隠居がニヤリと笑う。「それで、本によると、ムクドリだそうだ。それから、さっきわしが窓から見ていたのはオナガという野鳥だよ。名前の通りの細長い尾があって頭は黒い。きれいな鳥だけど、ギューイギューイと鳴く声はちとうるさい。鳴き声が聴こえたので、そっちの隣家の樹木のほうを見たら葉のかげの枝にとまっていたんだ」

「バードウオッチングの邪魔をしちゃいました？」

「いやいや」とご隠居。
「あのー、家賃、持ってきたんですが、ご隠居、物価も上がってるのに三万五千円のままでいいんですか？」
「熊さん、心配してくれてるのかい？　大丈夫、わしはもう食べていければね、それとすこしの晩酌にありつければ充分」
「そうですかい。じゃあ、今月の分ね」
「しかし、八つぁんはまだ先月の分も払いに来ないぞ。そうこうしてるうちに、家賃が呑み代に変わっちゃうんだから。まったく困った奴だ」
「その八つぁんですがね、この間、ちょっとムッとしたんですよ」
「ほー、熊さんにしては珍しいじゃないか」
「例の元モガキのことでね、八つぁんが『あいつ、けっこういい奴だったじゃねえか』なんて言うんで、『そんな変な情けなんていらねえよ』って言い返しちゃったんですよ」
「ほー、八つぁんがそんなことをねえ。昔のことを忘れちゃったのかねえ。八つぁんから聞いたことだけど、無法松さんと同じで、一人の労働者がモガキに襲われてね。ただ、そのときはみんなでそいつを捕まえたそうなんだ。で、怒ったみんなが囲んで追及してたんだと。そうしたら、マンモス交番の警官がやってきて、その襲撃犯を逮捕といえば聞こえがいいが実際には保護するようにして連れてっちゃったんだな。襲われた人は救急車で運ばれて入院したが、一時重体だった。ところが、二週間もしないうちに、朝、突然、『治ったから出てください』の一言で、浴衣一枚で追い出されたそうだ。すこし良くなったけど、全然完治なんてしてないうちにね。モガキは、それからすぐに罰金だけで釈放された。なんせ山谷ではケタオチ病院で有名なところだったけど、それだけが理由じゃないと八つぁんが猛烈に怒ってた。警察が襲撃犯の処分を罰金刑でお茶を濁すため、重症のまま入院していたんではまずいから、回復前にもかかわらず、病院を追い出されたんじゃないかと。ここの警察は本当にいい加減だよ。普通だったら強盗傷害で大変な罪だよ。もし逆に、山谷の労働者が他人にそんなことをしたら何年刑務所に放り込まれるかわかりはしないよ」
「えーっ、そんなことがあったのに？　八つぁん、甘すぎるよ」とすこしあきれ顔の熊さん。
「八つぁんも歳をとって丸くなったのか、それとも忘れっぽくなったのかな」
「だいたい、あの元モガキだって、反省なんかしてねえよ。こっちが警官の恰好をしてゴリゴリやったから、へいへい聞いてたけど、内心じゃどう思ってるのやら」
「ヤクザも警察なんか嫌いなはずだけど、警察権力にはからっきし弱いからな。一方の警察のほうは、ヤクザなんて人間と思ってない節があるのに、利用するときはしっかり利用するからねえ」。そのとき、ギューイギュイという声が聴こえてきた。ご隠居はそっちを見るために窓のほうに寄って行った。

ご隠居の早朝の散歩コースがこの頃すこし変わった。一年ほど前より遠回りになるが、コツ通りの回向院の前を通るのだ。まだ門扉は開いていないが、中を覗くようにして見る。そ

うして、わしにはあと残された時間がどのくらいあるのだろうか、などと考えたりする。以前は、死ぬまでたっぷりとはいわないが、まだいくぶんかの時間があると思っていた。

この回向院には、吉田松陰、橋本左内、そして高橋お伝や鼠小僧次郎吉の墓などがある。彼・彼女たちが刑死したのは、いまの自分と比べてずいぶんと若かった。二・二六事件の首謀者の一人で銃殺刑にされた皇道派将校の磯部浅一もここに埋葬されている。

そういった名の知れた者だけではなく、江戸時代の小塚原刑場では多くの者が処刑された。身に覚えのない罪で死んでいった者も少なくなかろう。昔からこの土地は、被差別空間であり、怨念を抱えてたどり着いた者が非業の死を遂げた場所なのだ。そして今でも、ここ山谷の日雇い労働者の取り巻く状況は厳しい。彼らの寿命といえば、日本人の平均寿命よりはおそらく十年以上短いのではないか。

わしは、なんで八年間も放浪の旅をしてたんだろう？　ジャック・ケルアックの『オン・ザ・ロード』を読んで影響をうけた？　ああいった自由で奔放な旅に憧れたのか？　いや、あれを読んだのは旅の終わったあとか、終わりのほうだったはずだ。

世の中への幻滅のようなものはあった。どうしようもない社会の歯車になるのを拒否する。そんなことを思っていたのかもしれないが、いまとなっては、それは後付けになってしまう。何かを欲していた。でも、それからずいぶんと時間はあったはずなのに、その何かを得られたのだろうか？　いまのわしには残された時間はもうそんなにない。では、時間がもっとほしいのか？

※『オン・ザ・ロード』＝一九五七年アメリカで出版。放浪体験をもとに書き上げた自伝的内容の小説。日本では、一九五九年『路上』という題名で最初に出版された。作者のジャック・ケルアックは、アメリカの小説家。アレン・ギンズバーグ、ウィリアム・バロウズなどとともにビートニク（ビート・ジェネレーション）を代表する作家の一人。

春になる。花が咲き始め、蝶が飛び回り始める。花の蜜や樹液を吸おうとモンシロチョウやアゲハチョウなどがいまを盛りと元気いっぱいだ。いまでこそモンシロチョウが飛んでいると、つい目で追ってしまうが、昔はモンシロチョウがそこら中にいっぱい飛んでいて誰も見向きはしなかった。

今年の春、ご隠居は、その中にあせた茶色の蝶がまるでゆらゆらと浮かぶようにして飛でいるのを見た。翅（はね）の先がすこしばかり欠けているようだ。とてもじゃないが、サナギからかえったばかりとは思えない。ということは、寒い冬を越してきたのだろう。疲れきっていて、もう残された生命のエネルギーはわずかですと訴えかけているようだった。この蝶は新鮮な蜜を体内に取り込むことで、再生するのだあろうか。いやいや、そんなことがあるはずがない、きっとじきに死んでしまうんだろう、という寂しい思いがご隠居の中でわいてきた。

※冬を越す蝶＝キタテハ、アカタテハなどは成虫で冬を過ごす。キタテハは枯れ葉そっくりの翅を持ち、外敵から身を守るように枯れ葉の中でじっとしている。また、アカタテハは

体から熱を逃がさないように動かずにいる。このような蝶は、葉の裏や枯れ草の間などで冬を越し、春に活動を再開して交尾・産卵をするのだ。暖かければ十二月頃まで活動する成虫もいる。

16

今日は「無法松君事件を糾明する会」の久しぶりの集まりだった。ご隠居の家に、ご隠居、八つぁん、熊さん、ヒガシ探偵、タカハシユウコ記者、そしていつの間にかメンバーに収まったサチの全員が参加している。ご満悦のご隠居が口火を切った。

「オートバイと自転車によるモガキ追跡大作戦、およびニセ警官・ニセ特別捜査班の隠密行動の成功を祝して乾杯！」。初めから会議ではなく、もう宴会モードに突入だ。全員の手にあるコップにビールが注がれた。十六歳のサチのコップにも今日はたっぷりのビールが。

「みんな、ご苦労さん。これで一歩二歩前進だな」

「タカハシさんはチャリンコでの追跡だったから大変だったんじゃない」とサチ。

「全然。だって向こうだってチャリだったから」

「尾行というのは単独より、今回みたいに追跡の先頭が入れ代わり立ち代わり変わるほうが相手に気づかれないからいいんですよ」とヒガシ探偵。

「でも、あいつは相当酔っ払ってたから全然気づかれる心配なんてなかったな」という熊さんの言葉でみんなが笑った。

「追跡大作戦には残念ながら不参加だったけどさあ、そのあとの俺のニセ警官もよかったろう？」。ここでみんなに同意を求めるような八つぁんの声。

「確かにな、八木刑事」とご隠居。

サチと熊さんが仲良く隣同士で座っている。

「熊さん、どう、免許取れそう？」

「いやー、なかなか教習所に行く時間がとれなくて」と熊さんが頭を掻いた。

「仕事が忙しいの？」

「仕事もぼちぼちなんだけど、八つぁんや日雇い仲間との付き合いもあるし……」

「『世界』で呑んだり？　あと川崎競馬場に遠征したり？」

「えへへへ」。苦笑いを浮かべた熊さんがすぐに真顔になって宣言した。「教習所に通って、ぜったいに免許を取るぞ！」

「あのー」。コップのビールを呑みほしたタカハシ記者が何か言おうとする。

「『大利根』のチューハイが呑みたいったって無理だぜ。でも代わりに持って来たよ。ほら焼酎の差し入れよ。炭酸は冷蔵庫にあるからそれでバッチリだ。何？　ビールで割る？　そいつは俺たち日雇い労働者にとってぜいたくってもんよ」ともうご機嫌の八つぁん。

「それは遠慮しとくわ。未成年のサッちゃんの前で醜態は見せられないものね。それで、酔っ払う前に、話したいんだけどいいかしら？」

「もちろんだよ。あと三十分もすれば、みんなわけがわからなくなるから、大事な話は今がいいよ」とご隠居。

「では。みなさん、この間は大活躍だったでしょ。それで、わたしもすこしはやらなくてはと思って、ヤクザ暴力団の縄張りについて調べてみました。ヤクザの抗争って、たいてい縄張りが絡んでいるでしょ。その筋に詳しい先輩の助けも借りて、とくに縄張りの貸し借りについて調査しました。無法松さんがモガキに襲われたのは、普通のモガキ事件とは違うということで、ならば少し違った角度から見てみようと思ったのが……」

――（以下はヤクザの縄張りとその貸し借りについてのタカハシユウコ記者の話）悪徳のヤクザが縄張りを広げようと思って、老舗のヤクザが取り仕切ってるところを奪おうとする。そして、老舗ヤクザの組員あるいは組長が殺されることで、ついに堪忍袋の緒が切れた主人公の、高倉健や菅原文太、藤純子が悪徳ヤクザの組になぐりこんでやっつける。これって、ヤクザ映画の定番ですよね。だから、ヤクザの縄張りっていうのはみんな知っている。でも、それが貸し借りされているなんて知らないですよね。縄張りは昔から継承されていて、それを時に貸したり借りたりしているようです。その大家と店子のような関係がこじれて抗争が勃発することもあります。ただ、大家が力を持ってるとは限らず、店子のほうが強い場合もあって。地代みたいなものをもらっている側が、本音は縄張りを返してほしいのだけど、店子の強い暴力によって押さえ込まれてるところもあるらしい。表面的に友好関係が維持されているのはそういう事情もあります。

東京の一等地の銀座、六本木、渋谷もその「貸しジマ」制度が長くとられてきました。大家が縄張りの「所有権」を、店子が縄張りの「営業権」を有しています。普通は、地代を店子のヤクザが大家のヤクザに支払ってるわけですが、その関係がうまくいってる場合はいいけれど、関係がこじれると抗争に発展することもあります。例えば、今までは東と西のヤクザ組織は敵対していて、東のヤクザ同士で問題なく貸し借りをしていた。ところが、大家だったヤクザ組織の親分が、西の組の親分と突然、盃をかわして兄弟関係になるなんてことが起きる。そうすると店子である組は、大家が変わるわけではないが、いままでとは内実が異なるので、縄張りの営業権を今まで通り行使できるのか、つまりシノギができるかどうか、組の存亡にかかわることになります。だいたい、そういうときは、いろいろあったあと、手打ちとなるわけですが、その歯止めが効かなくなると組と組の抗争ということになります。唐突に、東と西の上部団体の親分同士が盃をかわしたことで、傘下の組からの不満が爆発して内部抗争となる場合もあります。

あと、縄張りを貸していた団体が解散したために、つまり大家がいなくなったために、今まで店子だった立場の組織が大きくなったり、それとは別に外部のヤクザ組織が進出してきてシノギをする団体が乱立してしまうこともあります。

中京のほうでも縄張りの「貸しジマ」制度をめぐって、六十年代に抗争が起きています。老舗の博徒組織のA一家は広大な縄張りを所有していて、Bというヤクザ組織に縄張りを貸し出していました。Bはその「借りジマ」を、さらにC組に貸し出していました。つまり、

又貸しですね。ところが、Bの親分が引退することになり、A一家に縄張りを返すことになったので、A一家は、縄張りを実質運営しているC組に返還を要求しますが、C組は返還を拒否します。その結果、A一家とC組（および上部団体）の間で抗争が勃発します。A一家側の動員力が勝った結果、C組が縄張りを返還することで抗争は終わりました。

「これで、終わり。みんな、聞いてた？　二十分だから大丈夫だったよねえ、八つぁん！」
「も、もちろん、聞いてたさ。しかし、ヤクザをやっていくのも大変だなあ」
「無法松さん事件の解決には、直接関係ないかもしれないけれど。前に、『金が絡んでくればヤクザは動く』ってヒガシ探偵が言ってたでしょ。覚醒剤というのは、相当なお金が動くもんだから」
「しかし、嫌になるなあ。世の中、金がすべてか」としかめっ面のご隠居。
「義理と人情、任侠の世界なんてどこに行ったのかねえ」と八つぁん。
「でもさあ、八つぁん、ヤクザなんて昔からロクなことしてないよ。勝新の座頭市に出てくる奴を見てみなよ。貧乏人をいじめる、女衒が買ってきた娘を死ぬまで客をとらせて働かせる。それで、なかには十手を預かって役人や強欲な商人と組んで悪いことのし放題だ」
「座頭市はいいねえ。最後のほうで、そいつら悪人をバッタバッタと切りまくって、『ああ、いやな渡世だな』なんてつぶやいてね。座頭市っていうのはほんとの渡世人よ」と日雇い渡世人の八つぁんが言った。
「そういえば、熊さん、どっか座頭市に似てるじゃん」とサチが声をあげた。
「ふーん、熊がねえ」と八つぁんが不服そうな顔をした。しかし、すぐに気を取り直したように大声をあげた。「さあ、これからは大宴会だよ。みなさん、呑んでくださいよ。ヒガシさん、今日は静かですね。あっ、そうか、一仕事も二仕事も終わった？　でも、これからまだまだですよ」。八つぁんはこう言い放ったあと、アルコールの補給のため向こうのほうへ行ってしまった。

残されたかっこうのヒガシ探偵は、タカハシ記者と目が合った。いつのまにかビールではなく、八つぁんが差し入れた焼酎でつくったチューハイを手にしていた。
「タカハシさん、ヤクザの縄張りと貸し借り、面白い報告でしたよ」
「聞いていて、ヤクザの上部団体と下の組の関係も一筋縄ではいかないのだなと思いましたな。で、なぜなのか、江戸時代の幕府と大名との関係が頭に浮かびましてね。似てるとは言えないかもしれないが、どこか通じる……」。そこに、ご隠居が登場して口を挟んできた。
「幕府と大名？」と怪訝な顔のタカハシ記者。
「幕府は大名にいろいろと押し付ける。参勤交代、国替えなんかで金を使わせ、大名の勢力をそぐんですな。おまけに参勤交代では、江戸にまるで人質のように大名の妻や子を住まわせる。命令されたほうの大名はそれにしぶしぶ従うが、本音はというと、お家が一番、藩が大事」
「あと、何とか普請とかいうので大名の財政にダメージを与えてましたね。大規模な土木工

事や建築工事を行わせたりして」とヒガシも相槌を打った。
「だから、ちょっとした飢饉でも百姓がたくさん飢え死にしてしまう。これは、借金を抱えた大名がその返済のために年貢米を江戸や大阪に送っちゃうので、貧民の口に届く食糧がなくなってしまって。つまり、飢饉という半ば自然災害ということだけでなく、経済的災害で餓死者が多数出るっていう構造だった」
「なるほど」とタカハシ記者。
「ヤクザの話に戻ると、上部団体は表向きは覚醒剤の売買はご法度、でも下の組ではそんなきれいごとは言ってられない。シャブを売らなければ上部団体への上納金だって払えないぞっていうのが本音でしょ」とヒガシ。
「やっぱり、無法松さんが覚醒剤売買のやばい現場を見たとか、あるいは知らないうちに立ち入ったとか？」とタカハシ。
「ふーん、そうだねえ」とご隠居がため息をついた。
そこに、だいぶ酔いが回った八つぁんが割り込んできた。「三人で何をコソコソ話してんだよ。そうだ、ご隠居、コソコソ話のついでに、ちょっと話があるんだ。内緒話ね。顔を貸してくんねえ」
「なんか怖いねえ」

二人は、その場からすこしばかり離れて話し始めた。
「熊は確か三十二歳か。サチくんは十六だな。もう五年もすれば、三十七と二十一だ。まるでないとは言えねえな。ねえ、ご隠居？」
「えっ？　そういうことか。世間でもまあないとは言えないが……熊とサチくんとはなあ」
「百パーセント、駄目ってことはねえでしょう？」
「そうだけど……」。八つぁんからのいきなりの発言に困惑の体のご隠居。
「熊に頭の中身を鍛えろったってそれは無理筋ってもんだけど、いまみたいに酒ばっかり呑んでないで、もうちょっと真面目に人の道を行くようにすれば、まんざら可能性がねえとはいえないんじゃないか」
「酒浸りの八つぁんがよく言うよ。『人の道を行く』だってえ？」
「ちぇっ、人が真面目な話をしてんのに茶化すんだから。熊はもう三十二だ。だけど、浮いた話の一つもない。そこんところをね、先輩の俺としては気にしてたわけよ。で、この頃、熊とサチくんの二人を見ていると、ずいぶん気が合うみたいじゃないの。それでまあ……」
「八つぁん、自分だって三十路をずいぶん過ぎてるじゃないか。ぜいたくは言わんが、誰か一緒になってくれる人はいないのかね。もしいたら三顧の礼でもって、わしがお伺いしてもいいんだけどねえ」
「そんな話は一つや……」
「ほう、二つあったのか？　聞いたことはないねえ」
「二つはなかったけど、一つはあったの。ともかく俺のことはいいの。いまは熊の話なんだ

から」
「しかし、聞くところによるとサチくんは、ほらオートバイのリーダーの彼がいるんじゃなかったの。この間の元モガキ追跡大作戦のときにお世話になった彼だよ。それにサチくんが家出したときに彼の家に泊めてもらったそうじゃないの」
「確かに、そういう事実はある。でも、恋は一寸先は闇？　いや違ったな、恋なんて先がどう転ぶかわからない。そうでしょう？　といっても、やっぱり熊には不利だよなあ。ライバルは若い、しかも暴走族のリーダーでかっこいい。こっちは中年のうだつの上がらない日雇い労働者だもんな。ハンデは大きい。厳しい闘いになるなあ。しかし、熊にとって、えーと、なんて言いましたっけ、こういうときの言葉。何とかのチャンスなんだよ」
「千載一遇のチャンスかね？」
「そうそう、それよ」
「ところで、肝心の熊さんはその気があるのかい？」
「たぶん、ない」
「なーんだ、それだったらこっちが変に気を回してもしょうがないだろう？」
「それもそうだな。じゃあ、もうすこし呑みますか？」

「ご隠居、こんばんは！」と言うが早いか、八つぁんが家の中にどんどん入って行く。うしろから熊さんも付いて行く。「あれー、いないみたいだなあ。不用心なんだから。鍵ぐらいかけとかないと」
「八つぁん、奥のほうにいるんじゃないの？　この頃、窓から外を見てることが多いみたいだよ」
「えっ？　ついにボケが始まったのか？」
「ほら、無法松がやってた野鳥ね、それを見てるんだって」
「ヒマ人の趣味かい。ほんとに、いい身分だなあ。ご隠居、家賃ふた月分、持ってきましたぜ。いるんなら、早く出てこないと、持って帰っちゃいますよ」と八つぁんが大きな声を出した。
「ちょっと静かに。いま珍しい鳥が樹に止まってるの」という声とともにご隠居が奥のほうから出てきた。「ほら、うるさくするから飛んでっちゃったじゃないか。あーあ」
「珍しいって、何という野鳥ですか？」と熊さんが訊く。
「はっきりせんが、たぶんヒヨドリじゃな」
「ヒヨドリねえ」と八つぁん。
「あれ？　八つぁん、知ってるの？」
「知るわけねえだろ。知ってたって日雇いにとって何の役に立つんだよ」
「まったく、八つぁんは。そう言ったら身もふたもないじゃないか。二日前にな、ピーピッピッピーって鳴き声がしたんだ。聴いたことがない声だったので、急いで隣の家の樹を見たんだけど、どこにいるかわからなくて。でも、すぐにバタバタと一羽飛び去っていったよ。

よくわからなかったが、灰色のようだった。鳥類図鑑で調べたら、その鳴き声はヒヨドリらしい。さっきもその声がしたんで、じーっと探してたら、樹に止まってるのを見ることができたんだ」
「こんなところにも、いろんな鳥が来るんですねえ。この前のオナガだけじゃなくて」。熊さんがご隠居のほうを見て言った。
「ところで、今日は二人して何の用だ？」
「だから家賃を持ってきたんですよ」と八つぁんが口をとがらせた。「とりあえず、はい。俺のふた月分」
「熊さんのは先日もらったぞ。来月の分は早いんじゃないのか？」
「今日は八つぁんの付き添いです」
「熊がうるせえんだよ。家賃、払え払えって。このまま俺が家賃をためてるとご隠居が飢え死にしちゃうって言うから、そうなったら寝覚めが悪いからねえ」
「八つぁんだって、早く家賃を払ったほうがいいんだよ。すぐ家賃を溶かしちゃうんだからさあ。だいたいが酒だろう。それに馬券代だな。さっき会ったときに、『今週はずいぶん働いたなあ、よし、家賃でも払いに行くか』なんて言ってたけど、どう気が変わるかわかったもんじゃない。足が『世界』や『野田屋』に向いたり、上野の場外馬券売り場に遠出したりするから。で、付き添ってきました」
「いやー、気をつかってもらってどうもありがとう。熊さんはやさしいねえ。それがロマンスとなって花開くといいんだけど」
「ご隠居、その話はそこまで」
それを聞いて、不思議そうな顔をする熊さん。
「でもなあ、やさしいだけじゃあ、渡世人はやっていけねえよ」と八つぁん。
「なんだい、それ？」と熊さん。
「熊五郎くん。君にはこれからザブーンザブーンという世間の荒波が待ってるってことさ」